邯鄲
殺生石
野宮
百萬
自然居士

北

邯鄲

シテ次第

浮世旅にまよひきて夢路
をいつと定めん　是は蜀乃國の
かたはらに盧生といへる者也　我人間
に有ながら佛道をもねがはず只惘
然とあかし暮をおくり有まことや
楚國の羊飛山に貴き知識のまし

まことに家居く作程よき乃一大
事なれども寿ハやと思ひ給ふやう盛
へと慮ハ往訓し國を雲路の旅
すかふく文山を越ゆきハうて
とうもあさ猿哀野暮山くれさと
見れくがらのこ作り邯鄲の里に
とをやく慮はまるし　慮作

程ふ是當をや邯鄲乃里よ着く
作にいまた日ハ高く候沢而小猿
宿をかすゝめん宿ふ案内申
先ハ猿人かくしに一夜乃宿を借る
しと　是ハ蜀乃國乃傍に
ろて盧生といへる者あり我人間に
有ながら佛道をも願ハずたゞ

悃趣とあかし暮すところふ楚
國乃やうひさんふ尊き知識
のまします由承て候程ふ身
乃一大事をもたつねはやと思ひ
立候　扨其まゝハいつく
ふ居候ぞ　さうハ立寄一宿
見ろすかふ候　さうくハ是

かの国乃ふし邯鄲乃枕なるや是も
身を志るへの門出の世のちろミて夢乃
告を天乃あたふる成へし　一村
雨乃雨宿　日ハまた残る中宿
のかりね乃夢をみるやとかんたんの
枕よふしにけり　いかに盧生に
申へき事乃候　何事にて候ぞ

ワキ「楚國乃帝の御位をば盧生にゆつ
り申さんとの勅使是迄参りたり
シテ「思ひよらずや王位にはぞも何ゆへよそ
あつるなるさ　ワキ「是非をばいかくしる
つぎ御代をたもち給ふべき其瑞相
こうあらはれましますぞやく輿にめさるる
べし　シテ「こはうも何と夕露の宿り

かりやくむ身乃うしぞ業も習ひぬ身乃
ゆく法　ワキ詞「かゝつきをば思ひもちく
シテ「天にもあがる思ひして　ワキ上「玉の御
輿にのり乃道すぐに栄花の花も一
時の夢とも志らず雲乃上人となるぞう
かくある方觀の氣色やあらん
本より高き雲の上月も光は明らけき

きんば雲龍閣や阿房殿もみちみ
ちて宮殿も妙なる楼の庭は金
銀の砂をしきつ四方のかどへ入玉の戸
をとぢ出入人迄も宮殿かざるよそほひ
誠やみるよのうち寐覚の都喜見城の
楽もかくやと思ふ計の気色かや千貨
萬貨の法宝の数をつくしけり

扨千戸万戸のありさま天より色めさ
地よりひゞき雷のごとくもおびたゞしく
ひがしに三十余丈にこがねの山をと
つかせて宮てうねの日輪を出されたり
西に三十余丈にてうね山をつかせ
そればこそ月の月輪を出されけりたと
へば長生殿の内には不老門をたて

不老門の前には日月遅しと云心を
まなばれたり　大臣詞　めのよ奏聞申べき事の候
御位につき給ひてはや五十年也
然ば此仙薬をきこしめさるれば年一千歳
までたもち給ふべし去程に天の
こんづやかんろのはいも是迄持ちまいり
たり　そも天のこんづとは　大臣　仙

家の酒の名也　かうがいれもとやかれ
大臣詞　おなじく仙家の盃あり　寿命ハ千
世と菊の酒　大臣　栄花の春も萬
年　君も豊に　大臣　ましませは
国土安全長久の　栄花もいやま
しになをよろこびハまさりあふの菊
のさかづきとるらくよいざや呑かよ

トルテ

めぐれや盃の〳〵。数かさなれば菊水の

あまりにひかれてとくまくれ共まづ

さゝげ給ふ菊ころもの袂をひるがへ

してさされもえいもさめずあれや盃

の陰のめぐる宮こそ久しき

上歌　我宮の

我宮の菊乃志ら露白玉の幾

世積りて御ゐんもつきまじく

華の名も泉あれば汲めども汲めどもいや

ましにいづる菊水を飲めば甘露もかくやらん

と心も晴やかに飛立つばかり

有明乃よるもひるともあかきたけし

其栄花にも栄耀にもまこと此上や

あるべき　シテ上　いつ迄ぞ栄花の春もと

きはまりて　地　猶いく久し有明の月

月人男の舞なれバ雲乃羽袖を
かさねつゝよろこびの哥をうたふなる
からうたふ終夜日ハ又出てあきら
けき夜かと思へバ昼になり
ひるかと思へバ月またさやけし
春の花さけハ紅葉も色こく夏
かと思へバ雪もふりて四季

おりおりハ目の前にて春夏秋冬萬
木千草も一日に花さけり面白や不
思議やなかくて時過さ頃去れバ五
十年の栄花もつきて誠ハ夢の中
なれバ皆きえぐと失果て有つる邯
鄲乃枕のうへに眠乃夢ハ覚にけり
栄花の望ハ齢の長さも五十乃歓楽の

月人男の舞なれバ雲乃羽袖を
かさねつゝよろこびの哥をうたふよハ
かうくわうと終夜日ハ又出て
あきらけきよるかと思へハ晝となり
ひるかと思へハ月まださやけし
春の花さけハ紅葉も色こく夏
かとおもへハ雪もふりて四季

おりくハ目乃まへにて春夏秋冬萬
木千草も一日に花さけり面白や不思議や
ぎやなかくて時過ころされバ五
十年の栄花もつきて誠ハ夢の中
あれバ皆きえくと失果てありつる邯
鄲乃枕のうへに眠乃夢ハさめにけり
盧生ハ夢さめて五十乃栄花の

栄花もたちまちに惘然とおきあ
がりて、さしも多かりし、地女御更
衣の声と聞しハ、松風の音となり
地 宮殿楼閣もたゞ邯鄲の仮の宿
地 栄花のほとハ五十年、さて夢
の間ハ粟飯の、一炊の間なり、地ふしき
なりやはかりかたしや、つら〳〵人間の有
様を、案ずるに、百年の歓楽も、命を
終れハ夢ぞかし、五十年の栄花社
身の為にハ是まであり、栄花の望
もよはひの長さも、五十年のくわん
らくも、王位になれハ是まてなり
げに何事も、一すいの夢、南無三
寳〳〵、よく〳〵思へハ出離を求る知

識ハこ乃枕なりげに有難や邯鄲の
げに有難や邯鄲の夢乃世ぞとさ
とりえて望こそかなへて帰りけり

殺生石

ワキ 心をさそふ雲水の〳〵浮世乃旅に
出うよ ワキ 是ハ玄翁といへる道人也
我知識乃床を立去らず一大事を
歎き一見所もひろき縁に拂子を
うち振て世上に眼をさらすも此程
ハ奥州に候ひしか都に上り冬夏

さも結りやと思ひ作雲水乃
身はいつくとも定なきうき世の
旅よ迷ひゆく心乃奥を志ら河の
結ひこめたる下野やなすのの原よ
着きにけり〳〵 シテ なう其石の邊
へな立よらせ給ひそ ワキ そも此
石乃ほとりへよるまじき謂乃候か

シテ それは那須野の殺生石とて人間ハ申に
及ハす鳥類畜類迄もふるゝに命
なしかくおそろしき殺生石共しろしめ
されてハ僧達いかでもちかよる命をしかれ
ずこ立のき給へ ワキ 扨此石ハ何故かく
殺生をいたすやらん シテ 昔鳥羽院の
上わらはに玉藻の前と申し人乃

執心の石と成たるなり
ワキ上ん　かゝきなり
さて玉藻の前は殿上乃まじはりた
まひし身なれど此国に魂をとゞめけるぞ
言行くり　シテ　それも謂のあれば社
昔よりあしゝくおめ　ワキ付　はうすれ風情
言葉のもとゐはそれをとぶらはるゝあと
シテ　いやまくいさしう露乃玉も乃前と
ワキ上ん　ゆうし昔は都住居　シテ　今さら恋しかるらん
あら恨めしの鬼ひなに住居して憂人の
シテ下　恨もあらうか此野辺乃
人に　シテ　あらぬと恨　上歌同　なをも野の原に
立石のうつゝに苔に朽ずして跡までも
シテ上　執心を残しきて又立かへる草の原
物冷しき秋風の吹ところ松桂乃

桜よあさつき撫蘭菊の花よかくれ
住む此原の時しもものすごき秋の也よ
色うかな
クリ地 抑此たまもの前とやれ
出生出世定まらずして何く乃誰
とも白雲の上人なりし身なれどもよ
サシ シテ 緋の袴は紅をそめとし容顔美麗
かたちは御門の叡慮あさからしに
シテ上 ある時玉もの前が智恵をはかり給ふに
一事とておろかなし 経論聖教
和漢の才詩華管絃に至るまでとふ
に答への暗からねば シテ下 心廣くきらあれ
きれもとて玉もの前とぞ召されける
クセ ある時帝は清涼殿に御出ありし月
卿雲客の堪能あるをあつめ管

絃の御遊ありしに比ハ秋乃すゑ月
まだ遅き宵なれそらの雲乃気色す
さまじくうち吹風に御殿のとも
し消にけり雲の上人立ちさはぎ
めいめいとくとく申せば玉藻乃前が
身より光をはなちて清涼殿を照し
きれハ光大内に満ちて畫圖乃屏

風萩の戸闇の夜乃錦あらはしかと
見えよかしやまそでおらへよ月乃ごとく
あかり帝それよりも御悩となるを
叡ひしりハ安倍泰成占ひて勘
へ申やう是ハ偏に玉藻乃前が
所為なりや王法をかたむけんと
化生して来りたり調伏有てまつりある

へしと養まれも忽ちに数三世もうかり
けるへて王も仏生ともしのうよ
ろおほしい野寺の露と消し跡ハ是也
ワキ掛合
か様よくうしく語給へば我ハ中成
人や浅へ今ハ行もとうつむくへきぞ其古
ハ玉もれ前ともおゐのく数生名ゞ云
不絶みくはあり
上
宮や臨り乃悪念

さかくつるく善心をおこすへし然るに我
鉢をたゝいて同く念仏を
一度唱へ給ひし
上哥
其悦ひや我
姿ひるハ浮雲の夕煙の
立のほり
夜ハ暁やくばんきの姿あらハれ
けんぜん窓の夜の雨きれと洩夜
あかし燈乃我影なりと思召し

顕れ給ひて侍ふぞと石にはかくれ給ふ
ふしぎや石よりかくれ失にけり
末石心
あはれとはやしを先学末國悪逆の所
仏と成時は本より仏種具足せり
況や衣鉢を授くる者は成仏疑ひ
なき人も花を手向焼香し石面
に向つて佛身をあらはせば元来殺生

石とみせきさいは何れよりも顕あり
今生かくれことあるべきうくよきされ
有難き因じて己後は母と成仏せしめ仏
躰善悪乃善心と成り授け知識よ
なほ
石に精ありとて水に音あり風は大虚に
わたりて像なしてふあらはれし石風二つ
よりうまれは石魂忽あらはれ出たり

ぶしきやかきやあ此石二つに
割れ光乃うちをよくみれバ野干の像
は有ながらさもふしぎなる仁躰なり
今ハ何をかつゝむべき天竺にてハ
班足太子の塚の神大唐にては幽
王の后褒姒と現じ我朝にては鳥
羽の院の玉藻の前とはなりたるなり

我王法をかたむけんと仮に優女の形
と成玉躰に近づき奉れバ御悩
となる既に御命をとらんと悦しところに
所にあべの泰成調伏の祭をはじめ
壇に五色の幣帛をたて玉藻に御幣を
もたせつゝかんたんをくだきいのりしかバ
頓て五躰を苦しめて幣帛を

忽ち雲井を翔り海山を
越えて此野にかくれしを勅
使たつてみうらの介上総の介
両人に綸旨をなされつゝ那須野の
化生の者を退治せよとの勅をうけ
て野干は犬に似たれば犬にて稽古
あるべしとて百日犬をぞ射たりける

是犬追物の始とかや両介は狩装
束にて数万騎那須野をとりこめて
草を分つて狩りけるに身を何と
那須野の原に顕れ出しを狩人の
追つまくつさくりにつけて矢の下に
射ふせられて即時に命をいたづらに
那須野の原の露と消えても猶執心は

此野に跡つく殺生石となつて人を
とる事多年なれどもあひがたき
御法をうけて此後悪事をいたす
事あるべからずと御僧に約束かたき
石となつて約束かたきいしと成て
鬼神のすがたはうせにけり

野宮

是は諸国一見の僧にて候我此程は
都に候ひて洛陽の名所旧跡残なく
一見仕りて候又秋も末になれば
嵯峨野の方床敷候間立出一見せばやと
思ひ候是成森を人に尋て候へば野の宮
の旧跡とかや申候程に逆縁ながら一見せ

やと思ひ候 我此森に来て見れハ昔

木乃鳥居小柴垣昔にかハらぬ有

様なりこハ何とたる事やらん

よし／＼かゝる時節に参りあひておがミ

申ぞ有難き

下哥 伊勢の神垣隔なく

法の教へ乃道直に爰に尋て宮

所心もすめる夕かな

次第 花になれこし野の宮乃秋より後ハいかならん

サシ 折しもあれ物のさびしき秋暮て

なをしほりゆく袖の露身をくだくなる夕

まぐれ心の色ハおのづから千種の花に

うつろふ衰ふる身のならひかな

下哥 人社しらね今日ごとに昔の跡に立帰り

上哥 野の宮の森の木枯秋ふけて

所は嵯峨の色乃消えり思ひハいつまでを
何と思の草衰へてしもあらぬ
徒乃世にゆきのくるしそ恨めしく
ワキ 我此杜の陰にゐて古を思ひ心を澄
ます折節いとなまめける女性一人忽然と
来り給ふハいかなる人にてましますぞ
シテ いかなる者ぞと問せ給ふ其身を社問しまいら
すれ是ハ古へ斎宮にたゝせ給ひし
人乃かりに移りまします野の宮也然れ共其
後ハ此事絶ぬれ共長月七日の今日は
昔を思ふ年々に人社知らね宮所をき
よめ御神事を行ふ處に行来も知らぬ御事
なるが来り給ふハ憚ありとくとく帰り
給へとよ ワキ いやいや是ハ苦しからぬ身の

ゆくゑも定めなき世こそ捨人の住家なれ
へし翁も家ハなけれども日毎に
昔を思ふ折ふしハ哀れもなかなか成るや袖
女サシ「光源氏此所に詣給ひしハ長月七日
の日も今日に当れり其時節持給ひし
榊の枝を斎垣の内よりさし置給へハ
御息所とりあへず神垣ハしるしの杉も

なき物をいかにまがへて折れる榊ぞと
詠給ひしも今日ぞかし　ワキ上「実に面白き
そのみぎりに持給へる榊の枝も昔に
かはらぬ色よなう　女「昔にかはらぬ色
ぞとハ榊のミこそ常盤の陰の　ワキ上「森の下
道秋暮て　女「紅葉かつ散り　ワキ「あさぢが
原も　地上「うら枯の草葉にあるゝ野の宮の

宮の跡なつかしき此所に長
月乃七日の日も今日に廻り来にけり
ものはかなしや小柴垣いとかりそめの
御住居今も火焼屋のかすかなる光ハ
我思ひうちにある色や外に見えつらん
あらさびし宮所あらさびし此宮所

ワキ詞
扨々御息所の謂懇に御語候へ

クリ地
抑此
御息所ハ桐壺の帝乃御弟前
坊と申奉りし時めく花の色香迄
妹背乃心あさからざりしに

サシ女
會者
定離のならひ本よりも驚くまじや
夢乃世とほどなくおくれ給ひけり

下女
扨しもあらぬ身の露の光源氏のわり
なくも忍ひ〱に行き通ふ

上女
心の

思ふ乃あらは浅まし絶えし乃中あり
しるよつらねまさんによ思ひそて
絵うひ賤しけさの宮よ入分入ちよ浮心
いとあはれあまりやあさの花皆おも
みつく虫乃声をかきくよ松風の
御音まてもきひし道もう秋のかい
あしきもちてあらくて君家よまかせて

さや我ひつ情を飾て様と乃言葉の
露をみるれ花乃うち気なる
且侭うつ乃御稜ちよかきく河
あるの分字草乃よるへあさ心乃水
よ譲ちわくゆ名も鈴鹿山やそうきの
流よぬきくも信分まて誰乃恩ちん
乃ごとの堅きうひ数くらをもためしあさ

あと親と子乃ためきの都路よおとをもきゝ
し心をそ悩ませあれ 宮やいきれを
ゆかりよ婿入あともぬ気色具合と名
重ね袖くや 名も葉もとをもうひあさす
とそもつしぬきりてやよそなまふれまう
よしある具足もあきの方へと向き給へ
名なき身とはなちやあだ梅ハ此世

きもちかはしも はかなくるしき跡の
名の 御息所へ 我おもひと 夕暮れ
秋の風 森乃木の間乃夕月影 幾成
この名乃 墨木の鳴井れ二柱よ立ちくれ
て失よまる語立隠れ失よ まま
言や杜れ木陰の音哀しく 同じ色成
夢むしろ思ふをのへくよめかば 伊序路

さとうへやく野の宮の秋の千
種の花車我も昔に廻り
くるや月の光もかすかなる車の音
の近つく方を見れはあしろの古る
簾かけたる様也いかさま疑ふ所
もなく御息所にてましますかやさしくもあ
さいつなる身やらん いかなる車と
問ひ給へは思ひ出たり賀茂の祭の
車あらそひ主は誰とも白露の所
せき迄立ならふる 物見車の
様々に殊に時めく葵の上の 御車
とて人を払ひ立さはきたる其中に
身は小車のやる方もなしと答へて
立置たる 車の前後にはつと

よりて人々おしとゞめつゝ
ひとだまひのおくにおしやられて物見
車のちからもなき身のほどぞ思ひしら
れたるよしや思へば何事も報ひの罪
によもれじ身はなほ牛の小車の
めぐり〳〵きていつまでぞ妄執を晴らし
給へや〳〵
「昔を思ふ花の袖

月にとかへす気色かな
野の宮の
月も昔や思ふらん
「影さびしくも
杜の下露〳〵
「身の置所もあはれ
むかしの
「庭のたゝずまひ
「よそにぞかはる
「気色もかりなる
「小柴垣
露うち払ひとはれし我もその人も
たゞ夢の世とふりゆく跡なるに誰松

虫の音ハかれ／＼として風茫々たる
野の宮の夜すから懐しや
本よりかたしけなくも神風や伊勢
乃うちとの鳥居に出入姿ハ生死の道
を神ハ受すや思ふらんとまた車に
うち乗て火宅の門をや出ぬらん
火宅乃かと

百萬

次第
竹馬にいさや法の道まことの友
を尋ん
是ハ和州三芳野の者
にて候又是に渡りたる幼き人ハ南都
西大寺のあたりにて拾ひて候此
比ハ嵯峨の大念仏にて候ほとに此おさなき
人をつれ申大念佛にまいらはやと存候

あらわるゝ合縁の指子やげにありがたき
ともどもまいらし南無阿弥陀佛
南無阿弥陀佛南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏みな頼む人ごと
あの西の月あれや雲をまき西へ
ゆく阿弥陀仏やおまふたて誰か人
頼まゐる誰かたの西さるべき是かや

玉ゑぬ狂みだれ心か恋狂のちろう
車よあくる夜つむとも尽し
引くともひきやえいゑいさと
引かどよ聲をみきの力頼めや頼め南
無阿弥陀仏空や世のさとのやうやて
北首よまとひりてうく狂ての闇を晴
やらぬ朧月のうちと曇りて見つるよ

ともめる世よ尚三界ハ首かせやかせの
車ハとことハよいつをもなりてひく縁
えいさらえいさ ひきやく此車
わかれありく きよ百萬か姿ハ
本よりおもきハ黒髪を 荊棘のごとく
乱して かりたる烏帽子かけき
又眉根くろき乱墨 うつし心か村鳥

うかれと人ハかひもさて 思ハぬ人を
尋ぬきハ 親子の契りあさ衣 肩をと
結んでもすそまりき もすそを結びく
肩よりけ もすろきれ もとかごとの
みつれあむら南無釋迦如来彌陀佛と
信心をとるひも我子よあちこちあり
南無や大悲釋迦如来我子よあハせ

狂氣をもとめ安穏に守らせ給ひ候へ

（子）いかに申へき事の候（ワキ）何事にて候ぞ

（子）是成物狂をよく／＼見候へハ古郷の母にて御入候おそれなから余所なから問て給り候へ

（ワキ）是ハ思ひもよらぬ事を承る物かな猶ゝとくとしまいらせう

さるほとにいかに是成狂女汝が

（ワキ）国里ハいつくの者ぞ（女）是ハ奈良の都に百万と申者なり（ワキ）それハ何故か様に狂人とハ成たるぞ

（女）夫にハ死して後只独りの忘れ形見の翠子に生て離て候程に思ひの乱れて候

（ワキ）扨も子と云者のあらハ嬉しかるへきぞ

（女）問迄もあらしそれ故に狂乱れ髪の

生る人は面をさらしても我子は
思ひやあつて車に法の声ふらく念仏
申すをうるさいば我子に逢んといのる也
平せん 上 言痛しきはなう誠信心わろう
なくば於雅群集の中にあとうハ思ひ
逢けらん 女 うきつらき人の言葉より
ずうきに付ても身をうるさば法楽の舞

下 ともまつきありずやして たへやへによ
忝くも釈迦佛も羅睺羅長子と
歎給へも 上 我子にあふむの袖あ
まや親子あふ毎の袖あれや百万の
舞をそへ給へ 女 引そやようろつれ舞の袖
地 我子乃行末いのるあり 宮や杯ぞん
これハ行くとくもとめハ宿任ぬ時ハ

サシ女
故郷をおもひ此世ハそも何くれ程ぞや
牛羊径よりかへり鳥雀枝乃集まるよ
あはれなる世中ハあふ浪乃よるへなき
何く定水の月の影いつまであれ坂の
梢乃露の古郷よ
女上
うき年月も送
思ひまゐりを二世とかきしおかうのち
きりの末ハ花かつら結ひもとめぬあふ

下女
會れあつきまほと成果く比目の
枕志つき波の氣もちきりうれ
クセ
大奈良坂乃ごれてかしハれのさ面どうも
かくふも旅人のあさき跡の深て歩袖れ
あつかこ隠ぼあさよ思ひすかる年あまさ
黒流の月の影行しさ猶乃大寺の
柳陰みゆり子乃ゆく色白露のたき

別まくらいつちをしらぬよきうずて
かゝるぬ思ひ子まよひ出しはての川瀬も
あをによし奈良の都を立出て南
三笠山さほの川をうち渡りて山城
に井手乃里玉水ハ名のみしてうつる影
つも面影浅ましき姿ありきまよひ行
て月見を捨てゝ月乃筆のあゆひ

まの詞ぞよ住まで行旅よ都の西と
聞えつる嵯峨の寺に参りつゝ四方
の氣色を詠むれハ花乃うき木乃亀
山やそよおろす大井河城よ浮世の
さがあるしや蔵ろ行山櫻尾のつかき松
乃尾小倉の里の夕霞立こそつま
小塩の神かざしう多き花衣貴賤

群集する洪寺の法のうつらきざかりき
よりもこれよりも頃洪寺に有難
きがうきわくをしかわ身よやハ隠れ
あまた二仏の中間我らごときの迷ひ
ある道のきらめあらしとて毘首羯
磨うつさう赤栴檀のざる容やうて
弁力を現して天竺震旦我朝三国よ

渡りがたき難くも洪寺より現じ給へて
安居の法とや所摩耶夫人の
孝養の法為あればふ仏も法母をとふらひ
給ふ道そうし呪至人同乃身として
あるらハ母を恋まぬと子を恨ミ身を
かちぢ感歎してぞ祈りきる親子あふ
世乃神あれや百萬が弊を見て給へ

地上 あら我子恋しや是狂気人乃
手よおとや我子はこゝや覧あらが我子
恋しや吾子ゝなう南無釈迦牟尼
仏ど狂人ながらも子よきや逢と信心ハお
きもど南無阿弥陀仏南無釈迦牟尼仏
南無阿弥陀仏とど心あらひも浮縁な
からぞうらみよあつまそうひ給へ

あまりよみるぞて痛しや是ぞ我れをとれ
尋ぬる子よ能とよ見て給へとよ
心つよやとくおもしろく舞たまふあらば
がやうまちをはうらみあとあら
うらめしや是ハ思へどもかなく逢ハ
優曇花のたれまちえたり浮世ら
うつゝかまほろしか能々其の御業

さればよくば御本尊ハもとより所も
衆生の為めの父なれば母もろともに逢ふ事を
あふ法の力ぞ有難き親子の縁
三門の車路をともなひて帰る嬉し
けれ

自然居士

ワキ詞
抑是ハ東山雲居寺のあたりに
住居仕る者にて候爰に自然居士と
申喝食の候が一七日説法にて御
宣候しが今日結願にて候間急ぎま
いりて聴聞申さばやと存候
シテ詞 雲居寺造営の
札召れ候へ々雲居の造営寺用の月まいり

猶乃あくちかよ説法一座宣しとく
導師高座よあかり登礼盤ねうち
あしづし三敬白一代教主釈迦牟尼
宝号三世乃諸佛十方の薩埵よ
とてまうちく総神分よ般若心経
や是ハ諷誦をもちあきゆう　宝号也
ハうつくしき小細よそて息つて此諷
誦文ととけ読んとへ　敬白うくれ諷誦
乃うらず三宝衆僧乃供布施一裹ぞ只
きこゆさん歳ハ二親菩提佛
果の為ぞその代衣一重ぞ三宝よ供養
しちまれば西天乃貪女ら二衣を僧
よ供ぎしハぞ乃後の世乃縁ら今の
貪女ハ親のため　その代衣惜め

きびしく浮世の中をとらく世をくらす暮
先此諸共よ同し量よ生きんと候
あきなひに自然居士墨染の袖をぬらす
かずの聽衆も色その袖を濡さぬ
べからず 加様に云者ハ東国方
の人商人なり我此度都よのぼりあまた
人を買取て候ふ十四五計成女を買

取てん候か昨日かの門脈をとをりて候
狂よやあそれのまゝ歸らんと思ふに渡り
作りけるハ小き者ハ親の追善と
やらんてきひつる狂よ説法の座数
よあるもちると自然居士乃もう被
寺よ占門をまよ来れみうもちるよう
返さへうの口將 やかられハこそ見よみよまよ

急てつれて御入候へ　やがてまいらう

申あぐる　やうがあるほどにつれてゆき

いつに居士へ申候　何のかのそ　唯

念仏誦とおきてはませてあらきれさい

男来りて追立て行は殺よやる

ましきと申候へハやうがあると申は殺よ

やゝそては　意曲もあやはぎ始より彼女ハ

やう有ときよみてんげ甚しく訓誦とあきを

はなもなく唯小袖かうかへの代にとうい

てはなりもと不審よ候へか居士か相

嘗しは彼者ハ親の為追善の為よ

我ハそと此小袖まへてかうをあきた

るを思ハはござあらハ唯今の者ハきうて

商人はてんへしかきハ道理ておハしう

こゝにてん狗道よりまいりとゝめたるかみそ
ハ叶ふまし人商人なとハ東国へ下
るへし大津松本へ急き行とめう
すゝみてハ皆々出かゝりてハ叶ふま
し居士此小袖を持て行ハせめよくて
つれて此人をまちぬくいやまれハ
今日ハ此説法の座にはりはへしいや

く説法ハ百日の其日有なれとも善悪
の二つを弁まへ為とそしこれ女ハ善人
商人ハ悪人善悪の二道爰に極つく
せハ今日の説法ハ是迄なり世野の沙
功徳普及於一切我等與衆生皆共
成佛道修行のためにあかれて
も捨人をたもとくへし今ハ出く

ず、こゝろも、はや白浪乃此舟路をとや

（地）急ぐ身を（シテ）舟なくとても渡の

道よりほかをとゞめよ（シテ詞）なふ〳〵其

は船へ乗らう（ワキ詞）是ハ山田矢橋乃

わたし舟にてもなきを何しに招う

き給ふ身を（シテ）我も棹人なあら候

渡乃舟ならば社其は舟へ乗や

らう（ワキ）扨此舟をハ何舟と知召れ

て候（シテ）其人買舟の事ならうよ

（ワキ）あら音たかし何とも〳〵（シテ）道理〳〵

今売る人や白浪乃音高しと

ハ道理ありながらとよつるべきを舟漕

ぬものさうよ（ワキ詞）櫓よりかゝるとも

物ありながらと言ハいきあかさう

シテ「水の煙の霞をも一葉かゝるをぞうて
よそに二三まちかく見え遠くへ漕よる
舟あれハなどかハ舟とハいはるゝ哉
面白くものくるはれり拂何乃思や
らん
シテ詞「是ハ自然居士とや説経者なる
てはかく説法の場を乱さんや恨やな
ありたり　ワキセリフ「説法ハ道理を宣がる

我らハよひの舞曲をも　シテ「御覧候へ
ともやはらかにそうよみかくよ本すれハ
縄ハしまりすゞ舟にも乗せて叶ハじと
ぞなきもをりよひさゝつかみたゝ
取付ひきもどし世　ワキ「荒腹立やさな
うち衣に隠れてえいなうひきもせう
料りにとてぞういひをもつて報ひやう

シテ「うろたへて壱乃ぬすびとハ家のうちへしのびや
ゆつ済ん 同「何しにとめし成へきて
シテ「ひき立みれハ 同「身にハ縄 くちなハ
わかつのつまをへめおきとも拝か出
こハ シテ「意こ便の者やがてつき
て法よもそうて心安くぞなく
同「我も自然重なれより法打れ久

シテ「此者どもをちらへ小袖をさされけるハ
此損もなし 同「まつて世度ハ之を
実に嘆かれけり シテ「何事にて候
同「けんか稚児の中に大法乃んずれども
いかにとしやる人も実にぞかつてひくく
同「ちかく法ならで弱なれしまつきけれまし
シテ「妻細家ハ又稚児の中にもかつさい大

法乃んぶが様ようかも便よあり者なり
行拿ぞしたれきられハがしたれ居
室へ帰らぬ法すくは狸よぞ青乃法
ともゞ破るまじ文さあつの法とも
破らせやまじ所詮此者とつまて
奥州乃国へハかるたゞかねよりハ
おりまし候　ワキ　舟よりをうれおりあて

へ拷詞をいたさう　シテ　拷詞といつそ捨
うぞ行　ワキ　命をとらう　シテ　命をとる
大なつつとおりましい　ワキ　なまよ命
をとらるゝなつつとおりましいとはいや
シテ　申されるな　ワキ　いや此自然居士よとく
あつからそばよあつかりおり　ワキ　何事
みそばう　ワキ　はやく是へ行と仕へ

ワキ「是ハかゝる人しなくてハ叶ひましく候
扨も案し候に奥より人商人の都に
上り人に買はるゝ自然居士とやらを
説経者をとりひれたるなんやく
やはり一大事にて候程に急ぎ帰らし
なりては叶ひまし　ワキ「我らも左
様に存候去なからたゞ其分ハ無念
に候程にしはらくなかつくへは候はうずるを
るまでは　ワキ「さて候はん　ワキ「ありたく
自然居士急いで舟よりあがり給へ
シテ「いやく御舟には下まじく候　ワキ「何の
御舟のなき所はあがりもし候　シテ「船頭殿
の顔の色社あへとりつけ候　ワキ「いやさら
ども多くさう候まじ又是なる人の中

たましゐべらず度ゝなくゑやこへよりては
自然坐禅の事をぞ承りなく候
しかしながら法の道もあれと申ままは
却して坐禅まゐらするはなすくは
うれば法偈りみては一年今のごとく
説法は宣ひし時にて聴衆の眠り
覚んとて高座の上にて一しは禅

あるらば奥義も其中へは強ず一
たし也禅なへあるみれは狂言綺
言などは強まを換のなりもなへし禅
をまなひたく此義をと給りなきら悦
志禅をなんて其時乃ちざりにしりて上ま
らきんぺし忠ま急れ乃合見をとなて
法禅久能くあとを無まるる給よは

此寺をと給りしまゝれ九゛明をはなそん
ありし居士をときよあつてもゝとせとあ
そへうとしげお傾よられハつまある
何のつまあるべき　シテ上 志賀のからさきの
ひとつ松　地 つまあさき人の心なれ
柳は乃ぞとうりもと尋ぬ始よ水上黄
帝乃法宮よりうるもとうて流き貨

狄かきりてとより出けり　宗衣よま
蚩尤といへる逆臣ありかれを亡ぼさん
とするに烏江といふ海を隔てゝ
き禰れもありしに黄帝の臣下に貨
狄といへる士卒ありし時貨狄庭
上の池のおもてを見渡せば折節
秋の末なるに寒き風にちる柳

の一葉ゆふりしを又蟲といふ虫
是も塵よ落きるか其一葉の上
よ乗つて節くまにかよひてよする
めくも柳の葉を吹くる風よさそう
われけよすむし秋露のたらくる
蟲のかる葬云もと思ふめしより
たくみて舟をつくりし黄帝是よ

名れて鳥はもとゝきわまりて蟲むを
やすく亡ほし御代を治めたまふす
一萬八千歳とりや　紛きハ舩のきん
乃字をきみよもふゑと云たり梅
又天子乃代領をまうかむしてん付
たくまうり舟を一葉と云ふ此
法字よりはじまれり又君乃御舟

さて龍頭鷁首とやらんも此代よりぞ
こゝわりへいつにや我らが舟も龍頭
鷁首と法いまひとつするにあまね迷
乃すまはさゝらをもつてはみきへ
さゝら竹とふりて又打つ笛船中に
竹のおぬよくらかの仏の経
行者の志ありても一切の衆生をさ

ときん鳥のかし居士も又其ごとく
ぢもとこつまゝまきものも似着をたた
すきんあせずれはさゝらのせところ
尋ぬるに東山にある僧の扇の
上に木の葉の落かかりしを持つる数
珠をすてさゝらとくとおさ払ひしより
さゝらと云ふ事始まりたり居士も

又其ごとくかぞへられしは八百八のしま
をかぞへ竹よハ扇のほねかず
ちり合を是ともろ所ハ志賀の浦
まれハちゝはやく志か辛濱の
松の雫をかぞへしとき風のま
ねざ志めすみてもそれハかぞへよう
幾千ともするわざしてハたもきてた

ひ絵へ千手もろもろなき所ひ弱よ
手をたえしげ浪のようつてとお
てはみまえ本来戦ハ浪の音つく
よをそ八雲とおよそハうちあ風雲ま
よあるかたのどろくとあれ時
きざりくる雨ハちらくとざうく
乃竹のかゞらをすりぜ乃珠のとう

やうし鞁をうちさゝらをすり
まり狂言なからも法の道なれハ菩
提の岸によせくる舟うちよりて
いとゝしうちつれまそだよ都へかへり
けれ

右之本者観世太夫織部
章句眞本令改行畢
正徳六丙申歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再板
皇都二条通御幸町西江入町
山本長兵衛